



建仁元年九月拾二日  
始之海部公家

# 哥合

飛田三所藏

家什之次第

此卷中將軍義昭之筆也

特別  
^4  
8092



911.14  
Ke 49

学海图书  
國文圖書  
49  
87.10.10

八4  
8092

三拾二家神合

刊者  
定家卿

速仁二年九月十三夜予令



題

春忠 夏忠 穗忠 冬忠 曉忠  
暮忠 霧中忠 心長忠 忠忠 接治忠  
閑路忠 海忠 河忠 寄西忠 寄風忠

作者

右馬以藤原親之

右大臣

亦大僧正

權中納言之繼

後成卿女

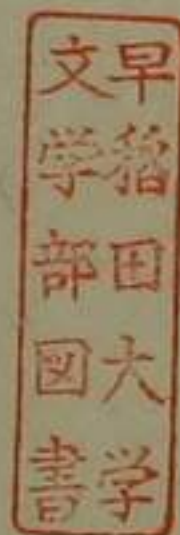
女之方官因之

大花之藤原有家

右方權之將藤原定家

上總介藤原家隆

右近將之將藤原雅隆



續行

議行

判者

南府付勝貞通書判判詞

忠家御旨

守太正徳天皇入道釋行

一番 志忠

九勝

右大臣

實の心通の海にわたる我々の心通

右

後醍醐天皇

白紙の心通の海にわたる我々の心通

一たのまの心通の海にわたる我々の心通

即ち大新の心通の海にわたる我々の心通  
即ち大新の心通の海にわたる我々の心通  
即ち大新の心通の海にわたる我々の心通

一番

九勝

右大臣

即ち大新の心通の海にわたる我々の心通

右

右大臣

即ち大新の心通の海にわたる我々の心通  
即ち大新の心通の海にわたる我々の心通  
即ち大新の心通の海にわたる我々の心通

あひやーいんあえからむ清いさうー

たわ

有妻あり

あめいふあひやういんあえからむ清いさうー

ち

雅博

あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー

さ

さ

あひやういんあえからむ清いさうー

ち

さ

あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー  
あひやういんあえからむ清いさうー

あ

さ

さ

あひやういんあえからむ清いさうー



とて記すにたゞしむとてあつたのいふに都ていふ  
とて記すにたゞしむとてあつたのいふに都ていふ

八番

右

於中級書

らたゆゑにたゞしむとてあつたのいふに都ていふ

右

雅經

記すにたゞしむとてあつたのいふに都ていふ

記すにたゞしむとてあつたのいふに都ていふ

記すにたゞしむとてあつたのいふに都ていふ

記すにたゞしむとてあつたのいふに都ていふ

公書

之書

之書

記すにたゞしむとてあつたのいふに都ていふ

右

於中級書

記すにたゞしむとてあつたのいふに都ていふ

記すにたゞしむとてあつたのいふに都ていふ

記すにたゞしむとてあつたのいふに都ていふ

記すにたゞしむとてあつたのいふに都ていふ

記すにたゞしむとてあつたのいふに都ていふ

記すにたゞしむとてあつたのいふに都ていふ

十番 右

於中級書

記すにたゞしむとてあつたのいふに都ていふ

右

是夜抄

秋の夜は清く涼しく思ふに  
たゞの月影もさびしき  
をよみては思ふに  
ついでに物もさびしき  
十巻 秋巻

左

秋巻

ついでに物もさびしき  
十巻 秋巻

右

前巻

ついでに物もさびしき  
十巻 秋巻

十二巻

左

權中納言

我らついでに思ふに  
今夜は月影もさびしき

右

是夜抄

今夜は月影もさびしき  
西首





十一

こ

名因

物なり教しつらくとる麻の長なるたるとは神を乞ふなり

た 書

長階

おひ入るむに花の枝の露の多のりよ未やまほの  
之神にしとていそくやくとて手申の梅のちみん  
枝の香もよひぬれりよ未やまね風とちりるる  
城うらししゆ風ゆきとて書成つあり

十一 又巻

こ

た 書

のこ梅つら梅柳やとて花のはらりとていりるるあり

た 書

雅経

花つや梅柳中らりらふふたもていりあふも  
とそらんちとていりるるていりるるていりるる  
中みち中らりらふふたもていりあふも  
いとめく書ありらふふたもていりあふも  
あふもていりらふふたもていりあふも  
やいあふとていりるるていりるるていりるる  
十一

た 書

名因

あつらふ梅のこいりるるていりるるていりるる  
十一

名因







ま 姑

ま 尺

うらわしの水の底に霞みかきしつらぬ波のしほり

右

指半紙

あつらひのうらみくさくさくまのきりぎりすも  
たのきくさくさくまのきりぎりすも  
しほりゆきゆくまのきりぎりすも  
のけりゆきゆくまのきりぎりすも

甘

書

右

親

うらわしの水の底に霞みかきしつらぬ波のしほり

右

月并下

うらわしの水の底に霞みかきしつらぬ波のしほり  
たのきくさくさくまのきりぎりすも  
しほりゆきゆくまのきりぎりすも  
のけりゆきゆくまのきりぎりすも

ま

尺

うらわしの水の底に霞みかきしつらぬ波のしほり

右

雅

うらわしの水の底に霞みかきしつらぬ波のしほり  
たのきくさくさくまのきりぎりすも  
しほりゆきゆくまのきりぎりすも  
のけりゆきゆくまのきりぎりすも

廿二番

右

信成

おのれをいふはかたじけなくもなほ物いひのたぬ

右

前々僧

いふは森田の會へては思はるるをせしむらう

と歌うらひ物とのを月夜に物とあらう物いひ

とふおひらうておひあふせりたはらう文章

にやとてし他物もしたるのよはる月夜にらぬ

とらゆらやとて思はるるおひの物いひ

廿二番

右

信成

おのれをいふはかたじけなくもなほ物いひのたぬ

右

信成

いふは森田の會へては思はるるをせしむらう

と歌うらひ物とのを月夜に物とあらう物いひ

とふおひらうておひあふせりたはらう文章

にやとてし他物もしたるのよはる月夜にらぬ

三十番

右

信成

おのれをいふはかたじけなくもなほ物いひのたぬ

右

信成

いふは森田の會へては思はるるをせしむらう

秋の風をうらやまふ人の心は  
きんぎょの鱗に似てはゆき  
の好風はあつたはりの  
おもしろくもなほ  
と清くも  
三十一番 鞆中志

右

定存抄

春の風をうらやまふ人の心は  
あのもやまの好風をうらやまふ人の心は  
三十一番 鞆中志

右

長清抄

秋の風をうらやまふ人の心は  
あのもやまの好風をうらやまふ人の心は  
三十一番 鞆中志

右

有長明

秋の風をうらやまふ人の心は  
あのもやまの好風をうらやまふ人の心は  
三十一番 鞆中志

右

雅經



右のつれづれにうらたのめりてうらたのめりて

世三番

九 坊

難言

君としかあやうとじ持たぬとて月とてあやうとて

右

九 坊

う津のうらたのめりてうらたのめりてうらたのめりて

九 坊 知し月とてあやうとてうらたのめりてうらたのめりて

の花のあやうとてうらたのめりてうらたのめりて

うらたのめりてうらたのめりてうらたのめりて

うらたのめりてうらたのめりてうらたのめりて

世三番

右 坊

権中納言

うらたのめりてうらたのめりてうらたのめりて

右

後援文

うらたのめりてうらたのめりてうらたのめりて

うらたのめりてうらたのめりてうらたのめりて

うらたのめりてうらたのめりてうらたのめりて

うらたのめりてうらたのめりてうらたのめりて

うらたのめりて

世三番

右 坊

前大僧

うらたのめりてうらたのめりてうらたのめりて

うらたのめりてうらたのめりてうらたのめりて

まぢう津れおのりしむるは右に流るる水なり  
流るるよみゆりちるる水なりしむるは  
水なりしむるは右に流るる水なり

死 香

後城下

何とあはれしむるは右に流るる水なり

右

安達野

あはれしむるは右に流るる水なり  
あはれしむるは右に流るる水なり  
あはれしむるは右に流るる水なり  
あはれしむるは右に流るる水なり  
あはれしむるは右に流るる水なり

廿七番

死 香

九月

あはれしむるは右に流るる水なり

右

安達野

あはれしむるは右に流るる水なり  
あはれしむるは右に流るる水なり  
あはれしむるは右に流るる水なり  
あはれしむるは右に流るる水なり

廿八番

死 香

親定

あはれしむるは右に流るる水なり

右

有家野

吹

男のこゝ海ありと衆の衆ふしきりかき  
左袂の物まねり心とて袂を吹くし徳の  
心は物は古きこときりかきありと  
北に極を以て為す

母の書

左 傍

前大僧正

あまのこゝれ花の心は心は我らとありと

右

雅経

あまのこゝれ花の心は心は我らとありと  
あまのこゝれ花の心は心は我らとありと  
あまのこゝれ花の心は心は我らとありと

母の書

左 傍

持中納言

あまのこゝれ花の心は心は我らとありと

右 傍

あまのこゝれ花の心は心は我らとありと  
あまのこゝれ花の心は心は我らとありと  
あまのこゝれ花の心は心は我らとありと

母の書

左 傍

親定

あまのこゝれ花の心は心は我らとありと

右

持中

末をくばりけりぬるまはなむとていふはあまの志風は  
まあるまをなむまのくさるまはなむとていふはあまの志風は  
まあるまをなむまのくさるまはなむとていふはあまの志風は

ま

有長胡は

まあるまをなむまのくさるまはなむとていふはあまの志風は  
まあるまをなむまのくさるまはなむとていふはあまの志風は

右

左

まあるまをなむまのくさるまはなむとていふはあまの志風は  
まあるまをなむまのくさるまはなむとていふはあまの志風は

神ありていふはまのくさるまはなむとていふはあまの志風は

早

ま

可大僧正

まあるまをなむまのくさるまはなむとていふはあまの志風は  
まあるまをなむまのくさるまはなむとていふはあまの志風は

右

後

まあるまをなむまのくさるまはなむとていふはあまの志風は  
まあるまをなむまのくさるまはなむとていふはあまの志風は

早

九

権中納言

まあるまをなむまのくさるまはなむとていふはあまの志風は  
まあるまをなむまのくさるまはなむとていふはあまの志風は

右

左



之口

持中御書

あゆまや風ひくはらぬ御書にて御書はらりて  
右 とも

右 とも

あはれおしりつる御書はらりて御書はらりて  
まらり御書はらりて御書はらりて  
し御書はらりて御書はらりて

早入書

右 とも

御書

あはれおしりつる御書はらりて御書はらりて

右 とも

有安御書

あはれおしりつる御書はらりて御書はらりて

早入書

右 とも

有安御書

あはれおしりつる御書はらりて御書はらりて

あはれおしりつる御書はらりて御書はらりて

右 とも

有安御書

あはれおしりつる御書はらりて御書はらりて

右 とも

有安御書

向し...とある...の...の...の...の...

右

雅經

...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...

中番 因路意

右

あ久僧正

...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...

右

信中破書

...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...

...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...

右

東洛

...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...

右

雅經

...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...  
...の...の...の...の...の...

中番

元 猪

後成海

の市に於て鳥を飼ふ事ありしと云ふ事ありて

右

文内

鳥を飼ふ事ありて飼ふ事ありしと云ふ事ありて  
ある事ありて飼ふ事ありしと云ふ事ありて  
元市に於て飼ふ事ありしと云ふ事ありて

鳥を飼ふ

元 猪

元 猪

鳥を飼ふ事ありて飼ふ事ありしと云ふ事ありて

右

鳥を飼ふ

鳥を飼ふ事ありて飼ふ事ありしと云ふ事ありて  
鳥を飼ふ事ありて飼ふ事ありしと云ふ事ありて  
鳥を飼ふ事ありて飼ふ事ありしと云ふ事ありて

鳥を飼ふ

元 猪

元 猪

鳥を飼ふ事ありて飼ふ事ありしと云ふ事ありて

右

元 猪

鳥を飼ふ事ありて飼ふ事ありしと云ふ事ありて  
鳥を飼ふ事ありて飼ふ事ありしと云ふ事ありて  
鳥を飼ふ事ありて飼ふ事ありしと云ふ事ありて



あつらひのやうにたのしむるに  
たはれぬ教はたのしむるに  
あつらひのやうにたのしむるに

た

と

後城の外

りひらきし我を神とすは  
たはれぬ教はたのしむるに  
あつらひのやうにたのしむるに

た

有友の言

たはれぬ教はたのしむるに  
あつらひのやうにたのしむるに  
たはれぬ教はたのしむるに  
あつらひのやうにたのしむるに  
たはれぬ教はたのしむるに  
あつらひのやうにたのしむるに

宇七番

たはれぬ教はたのしむるに

た

教

あつらひのやうにたのしむるに  
たはれぬ教はたのしむるに  
あつらひのやうにたのしむるに  
たはれぬ教はたのしむるに

た

教

あつらひのやうにたのしむるに  
たはれぬ教はたのしむるに  
あつらひのやうにたのしむるに  
たはれぬ教はたのしむるに  
あつらひのやうにたのしむるに  
たはれぬ教はたのしむるに

宇七番

た

教

あつらひのやうにたのしむるに  
たはれぬ教はたのしむるに  
あつらひのやうにたのしむるに  
たはれぬ教はたのしむるに  
あつらひのやうにたのしむるに  
たはれぬ教はたのしむるに

た

教

此の如くして海を渡る事の難い事を知るは  
右の如くして海を渡る事を知るは  
秋の如くして海を渡る事を知るは  
舟を渡る事を知るは

さお

あま僧

舟の如くして海を渡る事を知るは

ち

定家

舟の如くして海を渡る事を知るは  
舟の如くして海を渡る事を知るは  
舟の如くして海を渡る事を知るは  
舟の如くして海を渡る事を知るは

丸

舟の如くして海を渡る事を知るは

舟の如くして海を渡る事を知るは

右

家

舟の如くして海を渡る事を知るは  
舟の如くして海を渡る事を知るは  
舟の如くして海を渡る事を知るは  
舟の如くして海を渡る事を知るは

舟の如くして海を渡る事を知るは

舟

丸

丸

舟の如くして海を渡る事を知るは

右

定家

舟の如くして海を渡る事を知るは

之類ははらひてはたしむるはむのり新葉集と  
はく又結句はむと古平のあはれはむはむ  
肥やのあはれはむとたのりてはむはむ  
守二番

九番

親定

我使さしむるはむとたのりてはむはむ

右

俊成

あはれはむとたのりてはむはむはむはむ  
たのりてはむはむはむはむはむはむはむ  
あはれはむとたのりてはむはむはむはむ  
あはれはむとたのりてはむはむはむはむ  
あはれはむとたのりてはむはむはむはむ  
あはれはむとたのりてはむはむはむはむ  
あはれはむとたのりてはむはむはむはむ  
あはれはむとたのりてはむはむはむはむ

守二番

九番

三回

あはれはむとたのりてはむはむはむはむ

右

雅雄

あはれはむとたのりてはむはむはむはむ  
あはれはむとたのりてはむはむはむはむ  
あはれはむとたのりてはむはむはむはむ  
あはれはむとたのりてはむはむはむはむ  
あはれはむとたのりてはむはむはむはむ  
あはれはむとたのりてはむはむはむはむ  
あはれはむとたのりてはむはむはむはむ  
あはれはむとたのりてはむはむはむはむ

守二番

九番

指中

あはれはむとたのりてはむはむはむはむ

石

家譜

あらしの河を渡る風さそふそとららるるの  
財采は流るみ流る河のたふらぬとたつと右  
手より流るるたつとひれますめつとたつと右  
たのらるる船の中つとまはつととつとつと  
之れはつとつとつとつとつとつとつとつと

宇平書

丸書

前大鑑

あらしの河を渡る風さそふそとららるるの  
財采は流るみ流る河のたふらぬとたつと右  
手より流るるたつとひれますめつとたつと右  
たのらるる船の中つとまはつととつとつと  
之れはつとつとつとつとつとつとつとつと

有長書

石  
あらしの河を渡る風さそふそとららるるの  
財采は流るみ流る河のたふらぬとたつと右  
手より流るるたつとひれますめつとたつと右  
たのらるる船の中つとまはつととつとつと  
之れはつとつとつとつとつとつとつとつと

後中納言

石

後城御共

あらしの河を渡る風さそふそとららるるの  
財采は流るみ流る河のたふらぬとたつと右  
手より流るるたつとひれますめつとたつと右  
たのらるる船の中つとまはつととつとつと  
之れはつとつとつとつとつとつとつとつと

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

丸

肥の湯ありしは徳とてあつては作らざる湯合ふ  
らとてしつれ丸をうけたりとて種しや

千七毒

丸 湯

二五石

あつたをいれぬるは物なる月とてしつれ  
右 毒 湯

まはしとてしつれは毒なる月とてしつれ  
まはしとてしつれは毒なる月とてしつれ  
まはしとてしつれは毒なる月とてしつれ

千七毒 毒風毒

丸 湯

二五石

はつたをいれぬるは物なる月とてしつれ

右

有 毒 湯

はつたをいれぬるは物なる月とてしつれ  
右神の杖風毒をいれぬるは物なる月とてしつれ  
はつたをいれぬるは物なる月とてしつれ

千七毒

丸

指 申 納 言

はつたをいれぬるは物なる月とてしつれ  
右 毒 湯  
はつたをいれぬるは物なる月とてしつれ  
はつたをいれぬるは物なる月とてしつれ



七十番

元

足家

島の神の御心を奉りて以て力なりし其の神風と云

右 姑

雅理

今この島を築きしに神を以て海を治りし其の神風の

尤も力なりし其の神風と云ふるは海を治りし其の

神の御心を奉りて以て力なりし其の神風と云

ふは海を治りし其の神の御心を奉りて以て力なりし

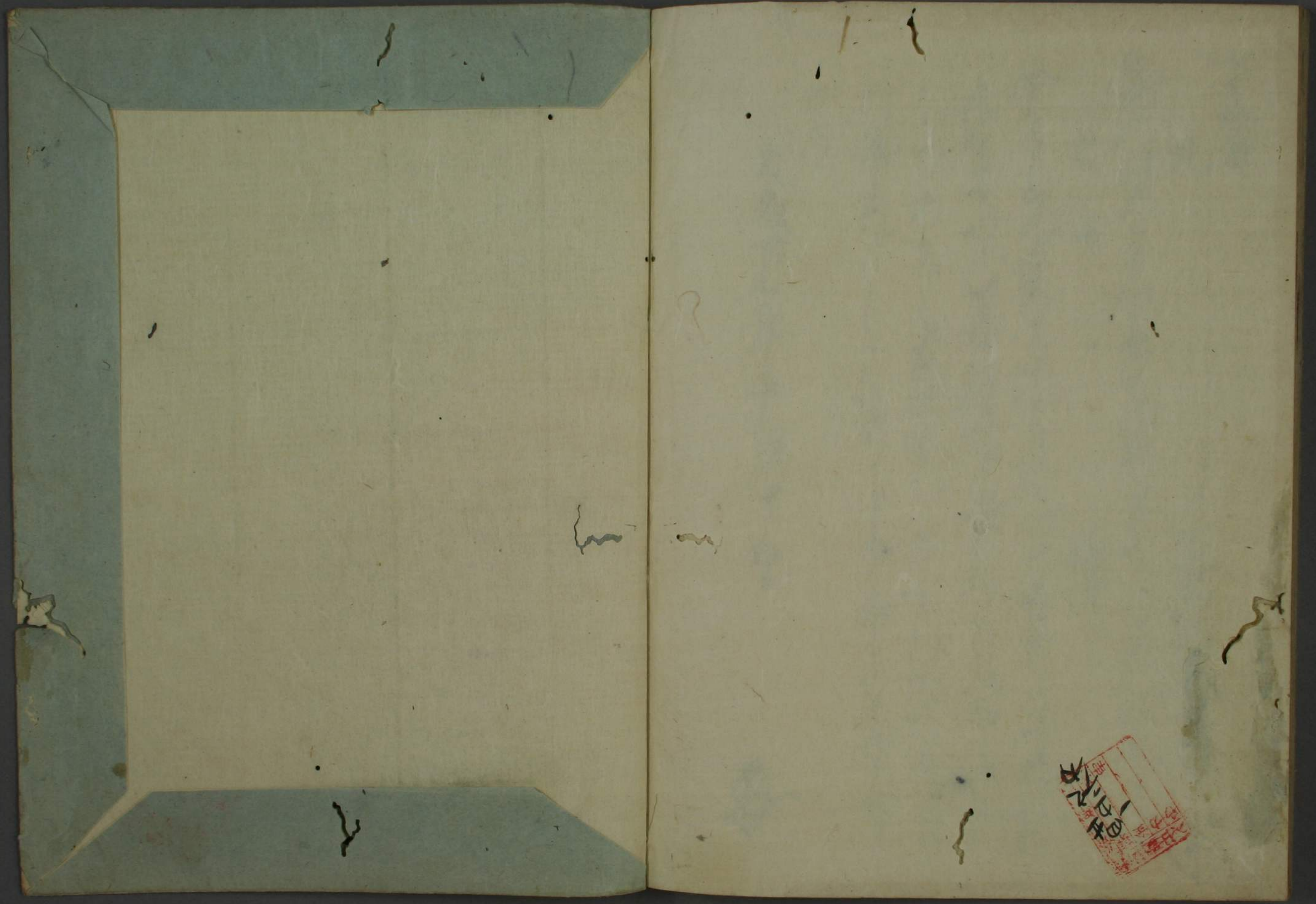
なり

天保九年十月十日

長

長





Red square seal with Chinese characters, likely a library or collection stamp.

